

中国南北朝時代の如来像着衣の研究（上）

岡田健

石松日奈子

はじめに

一、袈裟の着用法

二、內衣と結紐

三、裳懸座

結び

はじめに

仏教世界を多彩に構成するさまざまな尊格の中心にあつて教理の真髓を体現する如来は、大部分が、仏教の僧侶が纏うのと同様の、袈裟を纏う姿に表わされている。それは、遠くインドにおいて如来を造形することが行われて以来、仏教が東漸しやがてその果ての日本に伝えられるまで、まったく変わることなく受け継がれた図像上の約束であった。しかし、この長い道筋において、袈裟を纏うという理念は不変であっても、その着方、表面の意匠の表わし方にさまざまな変化があつたことは、実際の作例をたどれば明らかである。

中国南北朝時代における仏像様式の変化については、すでに幾人かの研究

中国南北朝時代の如来像着衣の研究（上）

者が注目し、仏像様式の「中国化」「漢族化」「南朝化」など、捉え方や表現の仕方は異なるものの、その要因や背景等について議論が行われている。それらの議論を見ると、南北朝時代に現われた仏像様式の変化は西方的（インド的）なものから中国的なものへの変化であつたという点では一致している。しかし、変化についての理解の仕方は一様ではない。それは一人ひとり、研究者の歴史観の違い、美術に対する様式観の違いなどにもよるものであるが、何よりも個々の作品についての正確な形状認識の作業が不十分であるため、目に見える形の上での変化について具体的な指摘がなされていないことが大きな原因であると思われる。

本稿は、中国彫刻史研究のこのような状況を反省しながら、とくに如来像の着衣表現に焦点を当て、個々の作品の形状認識を試みようとするものである。この形状認識という作業は単なる形式分析にすぎないかもしれないが、しかし、数多くの、そして一つひとつの作品の形状について共通点と相違点とを等しく理解することは、その変化の過程や影響関係をより具体的に考えるための基礎的な作業として有益なことと考える。そして当然それは、時代（時間）と地域という縦と横のつながりの中で捉えられなければならない。

作例の多い、そして広い地域にまたがる中国彫刻史の研究にとって、このような基礎的な作業こそが、むしろ現在必要なのである。

本稿では、中国の如来像の着衣表現について①袈裟の着用法、②內衣と結紐の表現、③裳懸座の表現、という三つの視点を設定して検討しながら、そこに「肉体の露出を減じる」方向と中国の民族的服飾の採用という二つの大きな変化を指摘する。

まず袈裟については、インドから通肩（両肩を覆う）と偏袒右肩（右肩をはだぬぐ）の二つの着用法が中国へ伝えられたが、このうち偏袒右肩においては、右肩があまり露わにならない着方が五世紀初頭の涼州地域を中心に定着し始め、次第に華北全域に広がったようである。また、袈裟末端部はインドでは左肩に懸けているが、涼州地域では左前膊に懸ける方式も現われる。六世紀代に入ると、さらに袈裟を二枚纏うものが現われる。

內衣は、五世紀後半頃に、袈裟の内側に中国風の衣が見られるようになり、胸の中央に結び紐を表わすものも多く見られる。

裳懸座も五世紀後半から現われ六世紀前半にかけて盛行するが、裳懸座の構成や形態にはいくつかの地域的な傾向が指摘できらる。

本稿は、このような変化の、指摘と形式分類とが目的であり、それらの変化が発生する要因についてはかならずしも十分な説明を提示するには至っていない。しかし、この作業を通じて、今日まで見過ごされてきた部分、例えば胸もとの結紐や內衣の実体、裳懸座に表わされた特殊な衣の表現などについて新たな解釈を提示しようと思う。そして如来像着衣における「中国化」という現象を、より具体的に認識しかつ地域差による多様性と独自性をふまえながら、捉えなおしてみたいのである。

一、袈裟の着用法

袈裟の着用法には通肩（挿図1、2、3）と偏袒右肩（挿図4、5、6）の二種があった。⁽¹⁾ 通肩はインド西部のガンダーラの仏像に、偏袒右肩はインドのマトゥラーの仏像に現われた。いずれも袈裟を左肩から背面へ回し懸けた後、通肩では右肩を覆って正面に回り頸のすぐ下を通し左肩に末端を懸け、偏袒右肩では右腋下をくぐらせて右肩を露わにし、正面に回って左胸を斜めに覆って左肩に末端をかける。以後この二つの着用法は両方の地でもに見られるようになり、東へと伝えられた。

挿図1 ガンダーラの通肩
石造仏立像 ペンシャール博物館蔵

挿図2 ガンダーラの通肩の仏と偏袒右肩の比丘
石造仏伝 個人蔵

挿図3 グプタの通肩
石造仏立像 マトゥラー博物館蔵

中央アジアでは通肩・偏袒右肩ともに見られるが、石窟第四六窟壁画や同G K二〇窟の塑造如来坐像(挿図7—

c)はインドのものとは少し様子の異なる偏袒右肩である。これらの像では袈裟が右肩や右臂を覆っているため、露出されているはずの右肩が露わにな

っていない。また、袈裟末端部はインド式に左肩に懸ける以外に、左前膊に懸けるものが見られる(さらにその衣端を左手で握る場合もある)。このような袈裟の着用法はインドには見られなかったもので、いずれも次に述べる中国の偏袒右肩像においてはかなり早い時期から認められる⁽³⁾。

1、涼州式偏袒右肩(挿図7)

クムトラ石窟で認められた新しい偏袒右肩の表現は、中国五世紀代の仏像ではかなり一般的となっている。中でも製作年代の早い五胡十六国の西秦(炳靈寺第一六九窟)や西涼あるいは北涼(敦煌第二七二窟)⁽⁴⁾の作例にすでに顕著である。例えば、甘肅省永靖炳靈寺石窟第一六九窟の塑造無量寿仏坐像(西秦・建弘元年(四二〇)銘)(図III、挿図7—a)では、右肩から右臂までを深く袈裟で覆っている。さらに、袈裟末端部は禪定印の両手の下をくぐって左前膊に懸かり左側へ垂れている。また、同窟壁画の如来坐像(挿図7—

b)では袈裟は左前膊に懸かったのちさらにその末端を左手で握るものがある。この時期全体としてはインド式に袈裟末端部を左肩に懸ける方式が多い

挿図4 マトゥラーの偏袒右肩

石造仏立像 カニユシカ3年

「菩薩」銘 サールナート博物館蔵

挿図5 ガンダーラの偏袒右肩

石造仏説法図 モハメッド・ナリー出土

ラホール博物館蔵

のであるが、それらにおいても右肩は袈裟が懸かっけていて露わにならない場合が圧倒的に多い⁽⁵⁾。

このようにインドとは少々異なる着方、つまり偏袒右肩でありながら右肩及び右肩から右臂までを袈裟で覆い、袈裟の末端を左肩に懸ける以外に左前膊に懸ける着方は、中央アジアから河西地区を含む地域で生み出されたものと推定される。特に、この右肩に懸かる半月形の袈裟の表現は中国の偏袒右肩像に限らず、後に朝鮮や日本でも一般的となっていくものである。

この右肩や右臂を衣で覆う偏袒右肩については楊泓氏と浅井和春氏の見解が注目される⁽⁶⁾。(ただし、楊泓氏が右肩に懸かる布を偏衫と解しているのは誤りであろう。)楊氏はこの形を偏袒右肩(楊氏は偏袒右肩を《斜披式服飾》と称している。)の中国における新しい形であるとし、中国の習俗に合うように、つまり肩を露出しないように改変した、民族的特色を具えた着用法であると述べている。浅井氏はこの着用法が敦煌を含む涼州文化圏に現われるとして「涼州式の偏袒右肩衣」と呼んでいる。

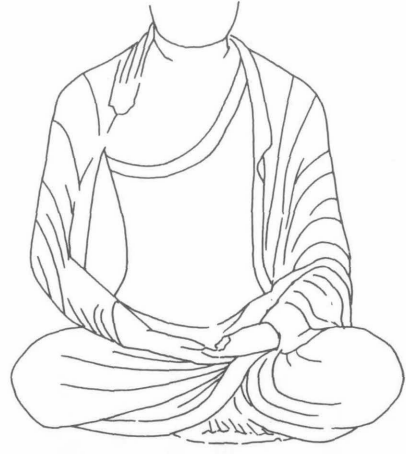
思うに、中国における仏像の着衣の変化は、大局的には「肉体の露出を減じる」方向で進行したといえる。肩を隠し、腕を隠し、胸を隠し、足を隠

挿図6 クプタの偏袒右肩 石造仏坐像

ボード・ガヤー出土 カルカッタ博物館蔵



b 炳靈寺石窟第169窟 如来坐像 (壁画)



a 炳靈寺石窟第169窟 塑造無量寿仏坐像



d 麦積山石窟第78窟 塑造如来坐像



c クムトラ石窟G K20窟 塑造如来坐像



f 龍門石窟古陽洞 比丘慧成造如来坐像
北魏・太和22年(498)銘



e 雲岡石窟第20窟 本尊如来像

挿図7 涼州式偏袒右肩

挿図8 雲岡石窟第20窟 本尊如来坐像

し、さらに手先や足
先まで隠してしまっ
場合もある。このよ

うに考えれば、右肩を袈裟で覆う偏袒右肩は楊氏がいうようにインド式偏袒右肩の中国的变化として捉えられ、仏像の着衣の中国化の第一歩と考えられる。しかし、後に現われる龍門賓陽中洞本尊式のように內衣や結紐を複雑に組合せ、裳懸座を伴う中国化の著しい偏袒右肩（賓陽中洞本尊像は後述するように袈裟を二枚着ていると思われるが、最外衣は偏袒右肩である。）と比べると、この形は右肩を袈裟で覆っているとはいえず、西方的な着衣表現として造像されていたと考えるべきであろう。それは同時期の菩薩像の着衣表現がまだ西方式であることから明らかである。この変化はキシルやクムトラなどの中央アジアから河西回廊一帯の涼州文化圏に早く現われていることは確実である。ただし、この変化が中央アジアと涼州のいずれに早く現われたかは即断できない。とりあえず涼州一帯では定着しているものと見なし、今は浅井

挿図9 龍門石窟古陽洞 比丘慧成造如来像
北魏・太和22年（498）銘

氏に従って「涼州式偏袒右肩」と呼ぶ。
（ただし、同氏は袈裟末端部の処理については「通肩、偏袒右肩とも、従来通り左肩にはね懸けている」とし、左前膊に懸けるものがあることにはふれていない。「右肩を袈裟で覆う」という中国的变化が、雲岡や龍門よりずっと以前の涼州地域ですでに始まっていることは興味深い。

この涼州式偏袒右肩は中国五世紀代の甘肅省敦煌莫高窟や甘肅省天水麦積山石窟（挿図7-1d）の他、山西省大同雲岡

石窟（挿図7-1e、8）（ただし雲岡石窟では後述べる第六窟式の特異な着衣法が出現すると、やがて涼州式偏袒右肩はほとんど見られなくなる）、河南省洛陽龍門石窟（挿図7-1f、9）などの石窟造像をはじめ、金銅仏や単独石像等でさかんに表わされ、着衣が本格的に中国化する五世紀末から六世紀前半にかけては、後述する龍門石窟賓陽中洞本尊像のように中にも一枚袈裟を着ける形式が現われた。六世紀後半以後はさらに右肩から右腕を覆う別の衣（ふつう「偏衫」と呼ばれている。）を伴う形式も見られるようになる。

涼州式偏袒右肩では、袈裟末端部は①左肩に懸ける場合と②左肩に懸けずに左前膊に懸ける場合とがある。このうち①はインドの偏袒右肩と同じ方式である。②は坐像に多く、左肩に懸けないのでインドとは異なる。涼州地域で新たに現われたものであろう。

2、中国の通肩

中国では偏袒右肩は、前述したように涼州地域で中国的な変化を蒙るが、

通肩の如来像においてはインド式がほとんど変化しないで受容され、造像された。炳靈寺第一六九窟や雲岡曇曜五窟に見られる通肩像(挿図10)はガンダーラやグプタのものによく似ている。それはおそらく、通肩という着用法がもともと衣で体をすっぽり覆う着方だったからにはかならない。「肉体を露出しなさい」通肩の着衣表現は中国的な趣向に合致し、抵抗感なく受け容れられたのであろう。事実、五胡十六国時代の小金銅仏中の通肩の如来坐像(挿図11)などは、中国の鏡などに表わされた神像の姿に近い。

従って中国五世紀代の如来像の着衣は、太和十三年(四八九)銘金銅釈迦多宝像(根津美術館蔵)(挿図12)の二仏並坐像に明瞭に示されるように、通肩形式と涼州式偏袒右肩形式の二つが主流であったといえよう。

3、雲岡第六窟式袈裟(挿図16)

ところで、五世紀も末に近づくと、雲岡石窟で如来像の着衣に大きな変化が起こった。雲岡最初期(雲岡石窟の開鑿は四六〇年頃⁽⁷⁾)の曇曜五窟本尊像のうち第一八〇窟(第一七窟は菩薩交脚像)はいずれも涼州式偏袒右肩の如来像が造られているが、残る第一六窟の本尊如来立像(挿図13)は袈裟の着方が大きく異なっている。背面から右肩を覆った袈裟は涼州式偏袒右肩の

ように右腋下をくぐるのではなく、そのまま垂下して右胸を覆い、胸元を広く開けて腹前を横切り、末端部を左前膊に懸けている。インド式の通肩や偏袒右肩、さらに涼州式偏袒右肩のいずれとも違つ、まったく新しい袈裟の着方である。広く開いた胸元には左肩から右腋にかけて僧祇支の縁が斜めに表わされ、その上に結紐をつくり長く垂らしている。雲岡では同様の如来像が第五・六窟にも集中的に現われる(図IV、挿図16-a・b)ほか、第一一・一

挿図11 金銅如来坐像 甘肅省博物館蔵

三窟や西方諸窟においても盛んにつくられていた。一方、これと対照的にインド式の通肩や偏袒右肩、さらに涼州式偏袒右肩も次第に減少し、以後雲岡の如来

挿図10 雲岡石窟第18窟 東壁 如来立像

挿図12 金銅釈迦多宝像 北魏・太和十三年(489)銘 根津美術館蔵

像はこの第一六・五・六窟式に袈裟を纏うものばかりとなる。

この変化については、まず長廣敏雄氏が着目し、雲岡第一七・二〇窟等の如来像の着衣を「西方直模式服制」、第一六・五・六窟等の如来像については北魏皇帝の服装、つまり冕服をうつした「北魏式服制」とし、その変化の要因については太和十年（四八六）の孝文帝の服制改革との関連を重視した。⁽⁸⁾

次に小杉一雄氏は、「北魏皇帝の服装を真似て、印度以来の仏衣の着方をいろいろと工夫した」とし、冕服そのものではないとした上で「冕服式仏衣」と名付け、長廣氏同様に雲岡で創案されたと考えた。⁽⁹⁾

一方、楊泓氏は四川省茂県出土の南齊・永明元年（四八三）銘如来坐像（図V、挿図16—c）や、南京西善橋の東晋墓の磚画に表わされた「竹林七賢と榮啓期像」のうちの榮啓期像（挿図14）と服飾上の特徴が同様であることを指摘し（ただし、榮啓期像の着衣は袈裟ではなく袖付きの上着である）、この新しい着衣は一般士大夫の褒衣博带式服装であるとし、仏教造像の民族的表現として捉えている。また、太和年間の北魏仏像の服飾の新しい変化は南朝の影響によるとして、この変化が南朝起源であることを示唆している。⁽¹⁰⁾

挿図13 雲岡石窟第16窟 本尊如来立像

吉村怜氏は楊泓氏の説をさらに強調し、永明元年像や南京棲霞寺の大仏を例にあげて南朝起源を説き、特に胸元の結紐を重視し、この結紐は紳帯であるとして「紳帯式仏衣」と名付けた。⁽¹¹⁾しかし、棲霞寺の如来坐像（挿図15）は、現在では後世の補修が全面を覆っていて上半身の着衣は判然としないし、結紐の有無も判らない状態である。また、当初の彫刻面を見せている裳懸座部分は後で述べるように雲岡第六窟の如来坐像とも龍門寶陽中洞本尊像とも異なる裳懸座である。また、この結紐は次章で述べるように「紳帯」そのものではないし、この着用方法で結紐を表わさない場合もある。従ってこの「紳帯式仏衣」という結紐にポイントを置いた呼称は、「仏衣」つまり袈裟の着用方法を説明する呼称としては適切ではないだろう。

挿図14 榮啓期像磚画
南京西善橋東晋墓出土

挿図15 南京棲霞寺大仏窟 如来坐像

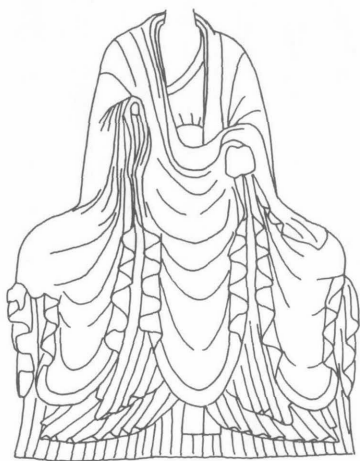
逸見梅栄氏はこの種の着衣を通肩の「変則」と考⁽¹²⁾え、田辺三郎助氏は「褒衣博带式の通肩」、浅井和春氏は「中国式通肩衣」と呼⁽¹³⁾んでいる。⁽¹⁴⁾袈裟の胸前を広く開ける点については、そこからのぞく内衣や結紐は次章で述



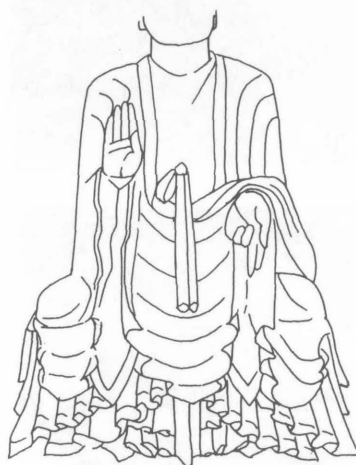
b 雲岡石窟第5窟南壁中層 如来坐像



a 雲岡石窟第6窟東壁 如来立像



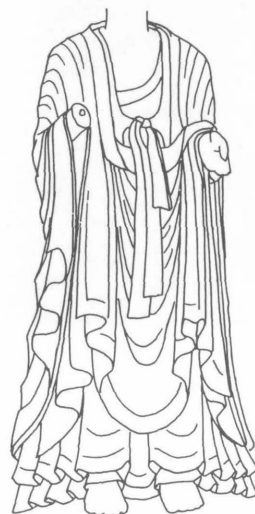
d 麦積山石窟第133窟第3龕 塑造如来坐像



c 石造仏坐像 南齊・永明元年(483)銘
四川省博物館藏



f 石造如来立像 成都万仏寺出土
梁・大同3年(537)銘
四川省博物館藏



e 麦積山石窟第135窟 石造如来立像

插图16 雲岡石窟第6窟式袈裟

べるように中国的な衣服に由来しているので、この着衣表現が中国風のものであることは疑いない。次に、袈裟の着方としては確かに両肩を覆うので、田辺・浅井両氏のいう「通肩」で良いようにも思われるが、ここにいくつかの問題がある。

インド、中央アジア、中国の炳靈寺第一六九窟や雲岡石窟曇曜五窟等の通肩は、袈裟は右肩から頸のすぐ下を通って左肩に懸かっている。つまり、袈裟は正面から見ても背面から見ても両肩を通して懸けているのである。しかし、雲岡第六窟等の場合は袈裟末端部は左前膊に懸けており、左肩には懸かっていない。左肩に懸かっているのは、インド式通肩では見えなかったはずの袈裟の懸け始めの部分である。この場合、背面から見れば両肩に懸かっているが、正面では左肩に懸かっていないのである。雲岡第六窟等の着衣は、理屈では確かにインド式通肩の袈裟末端部を少し左肩からずり下げて左前膊に懸ければ、そのような形になる。しかし、雲岡での変化は突然で、次第に袈裟が下方に降りて行ったというような変化の過程を確認できる作例は雲岡には見当たらない。また、この着衣を通肩の變形と認識するならば、この着衣の出現以後の雲岡で、インド式通肩が衰退するのは当然であるとしても、偏袒右肩までがほとんど見られなくなってしまふのはなぜかという疑問が残る。⁽¹⁵⁾ 当時の仏典には「偏袒右肩」も「通肩」もすでに使用されている用語であるが、⁽¹⁶⁾ 実際の形状についてどのような認識があったかは判らない。雲岡第六窟式のように胸元を開けた着衣表現が通肩の一種なのか、⁽¹⁷⁾ それとも通肩でも偏袒右肩でもない特殊なもの（例えばかつて長廣氏が提起された皇帝像）として造られたのか、今は判断を保留する。

この雲岡第六窟等の着衣表現は雲岡と永明元年像に限らず、龍門（挿図17）、鞏県（河南省鞏県）、麦積山（挿図16 | d・e、18）、天龍山（山西省太

中国南北朝時代の如來像着衣の研究（上）

挿図17 龍門石窟蓮華洞 本尊如來立像

挿図18 麦積山石窟第135窟
石造如來立像

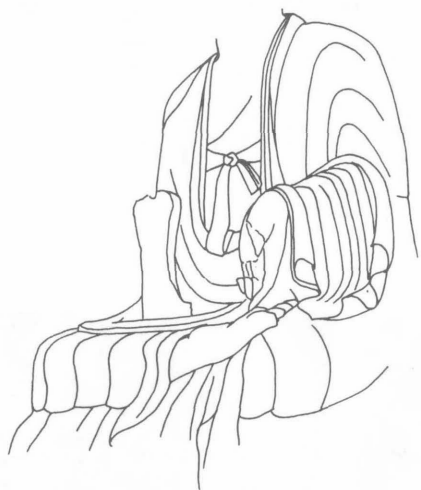
挿図19 石造仏立像 成都万仏寺出土
梁・大同3年（537）銘 四川省博物館蔵



b 龍門石窟皇甫公窟 本尊如来坐像



a 龍門石窟賓陽中洞 本尊如来坐像



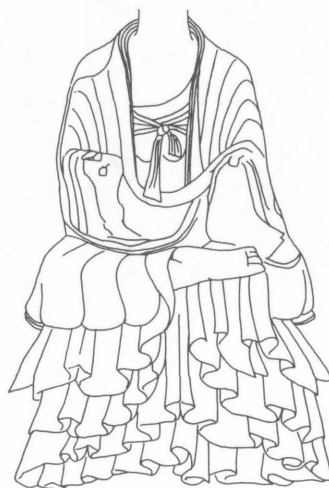
d 鞏県石窟第1窟 中心柱西龕 如来坐像



c 龍門石窟普泰洞 本尊如来坐像



f 石造碑像 北齊・天保2年(551)銘
ペンシルヴェニア大学蔵



e 鞏県石窟第4窟 中心柱南面下層
如来坐像

挿図20 龍門賓陽中洞本尊式袈裟

原)、敦煌莫高窟など北朝の石窟寺院や単独像、さらに南朝梁代の石像(挿図16—f、19)にも数多く認められ、南北朝期の中国風の如来像において最もポピュラーな着衣法といえる。さて、雲岡におけるこの着衣の出現時期と永明元年(四八三年)銘像と、どちらが先かという問題は、この着衣表現が南朝起源か北魏創案かという南北の仏像様式の流れを考える上で重要であり、また、雲岡石窟全体の編年にも関ってくる問題であるが、いま即断はできない⁽¹⁸⁾。その上、南朝の特に南京周辺の中央作が知られていない今日では、北朝と南朝を公平に比較することは難しい。また、袈裟末端部を左前膊に懸ける表現が炳靈寺第一六九窟無量寿仏坐像のような涼州式偏袒右肩に早く現われたものであることを思い出すならば、雲岡におけるこの着衣の出現に雲岡以外の涼州式偏袒右肩の影響も考慮されなければならない⁽¹⁹⁾。そこで今はとりあえず、この着衣表現が最も象徴的に造られている雲岡第六窟に代表させて、「雲岡第六窟式袈裟」と呼んでおく。これは、今後研究が進展してこれに代わる適当な名称が考案されるまでの一時的な呼び方である。

4、龍門賓陽中洞本尊式袈裟(挿図20)

さて、五世紀末の如来像の着衣において以上のような変化が進行していることをふまえながら、六世紀初めに造られた龍門石窟賓陽中洞本尊像(挿図VI、挿図20—a)に移ろう⁽²⁰⁾。賓陽中洞本尊像は、袈裟が両肩を覆い、末端部を左前膊に懸けて內衣や結紐をのぞかせている点など一見雲岡第六窟式袈裟の様に見える。しかし、ここで注意したいのは、上半身に懸かる袈裟が左肩では一枚のように見えるが、右肩では明らかに二枚表わされている点である。内側の分は右肩から襟状に垂下し、右胸を覆って腹前を横切り衣端を左前膊に懸けている。外側の分は右肩をほんの少し覆って右臂外側から右臂下を通り、膝正面部を覆ったのち、衣端は内側の分と一緒に左前膊に懸かって

いる。つまり、内側の分は雲岡第六窟式袈裟、外側の分は涼州式偏袒右肩(袈裟末端部を左前膊に懸ける方式)と解される。

内側の衣について、これをもう一枚の袈裟(大衣)とする見解は早くに大西修也氏によって示されている⁽²¹⁾。その後、久野健氏はこれをいわゆる「偏衫」と推定した⁽²²⁾。また、田辺三郎助氏は賓陽中洞本尊像と同形式の鞏鼎石窟如来坐像について、この衣を両肩に懸かる偏衫と考え、「褒衣博带式の服制をとる仏像はだいたいに偏衫を着けており、通肩の形ではこれがあらわれないが、大衣から右腕をぬいた形ではあらわれてくる。逆にいえば、後の形がこの服制での偏袒右肩になるのではないであろうか」と述べている⁽²³⁾。一方浅井和春氏は、律に「三衣重着のことが許され、また僧伽梨(大衣)二重のことも説かれている」として偏衫説を退け、「もう一枚の大衣、或いは大衣の下に着けた鬱多羅僧」とし、外側の袈裟については「中国式の偏袒右肩衣」と呼んでいる⁽²⁴⁾。このように本像の内側の衣については諸説あるが、袈裟を二枚着す作例としては麦積山石窟第一三三窟第一龕如来坐像(挿図21)や四川省成都万仏寺出土大同三年銘如来立像(挿図16—f、19)、同無紀年の如来坐像等があるので、筆者はこれをもう一枚の内側の袈裟と考える。



挿図21 麦積山石窟第133窟第1龕
塑造如来坐像

外側の袈裟については大西氏、田辺氏、浅井氏ともに偏袒右肩とみなしている。筆者は外側の袈裟は涼州式偏袒右肩と考える。ただし、その内側にさらに一枚の袈裟を表わ

したり、胸元に結紐を表現することは涼州式偏袒右肩には見られなかったことである。内側の袈裟は雲岡第六窟式と思われ、胸元の結紐も雲岡第六窟式袈裟に現われた中国的特徴である。すると、この着衣は雲岡第六窟式袈裟の上に涼州式偏袒右肩衣を着ている複合形と考えるべきであろう。この着衣を「龍門賓陽中洞本尊式袈裟」と呼ぶ。

この龍門賓陽中洞本尊式袈裟の作例は、龍門では北魏時代の魏字洞(挿図22)、皇甫公窟(挿図20-b)、普泰洞(挿図20-c)の、特に本尊級の像に見られるが、古陽洞や蓮華洞にはほとんど見あたらない。龍門以外では洛陽の東にある鞏県石窟(挿図20-d・e、23)に多い。そのほか単独像では、西魏・大統八年銘石造三尊仏坐像(五四二年、大阪市立美術館蔵)や北齊・天保二年銘碑像(五五一年、ペンシルヴェニア大学蔵)(挿図20-f、24)がある。また、河南省出土の線刻画(北魏・正光五年(五二四)銘 劉根等四十人造浮図記 河南省博物館蔵)(挿図25)など平面的な作例も見られる。一方、雲岡石窟では洛陽遷都以前も以後も見られない。

なお、袈裟を二枚着用し、内側の袈裟末端部が賓陽中洞本尊像のように左

挿図22 龍門石窟魏字洞 本尊如来坐像

前膊に懸かるのではなく左肩へ懸かるように(胸前でU字形をつくる)表わされたものがある。例えば龍門石窟古陽洞北壁第三層第一龕如来坐像(外側の袈裟は両肩を覆い胸前を開けて下垂する)、麦積山石窟第一二六窟奥壁如来坐像(外側の袈裟は涼州式偏袒右肩)(挿図26)、山西省太原天龍山石窟東峰第三・四窟如来坐像⁽²⁵⁾(外側の袈裟は涼州式偏袒右肩)(挿図27)、上海博物館蔵梁・中大同元年(五四六)銘石造如来坐像(外側の袈裟は涼州式偏袒右肩)(挿図28)などである。これらは龍門賓陽中洞本尊式とは区別しておきたい。

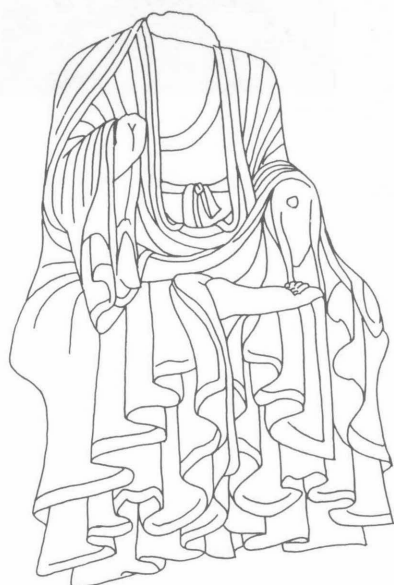
涼州式偏袒右肩と雲岡第六窟式袈裟の複合形式である「龍門賓陽中洞本尊式袈裟」は、明らかに雲岡石窟からもたらされたのではないし、また古陽洞にもない。すると、この表現は賓陽中洞で創案されたか、雲岡・龍門以外の地域からもたらされたことになる。ここで当然持ち出されるのが、すでに賓陽中洞の仏像様式が南朝にあったとする「南朝起源論」であろう。しかし、南朝銘の中国式仏像の最も早い作例とされる永明元年像の着衣も雲岡第六窟式袈裟で、賓陽中洞本尊像とは異なる。また、南朝起源を主張する研究者が南朝の影響を受けたと考えている雲岡や古陽洞の北魏時代の中国式仏像中に

挿図23 鞏県石窟第1窟 中心柱西龕 如来坐像

挿図24 石造碑像 北齊・天保2年(551)銘
ペンシルヴェニア大学蔵



挿図26 麦積山石窟第126窟 塑造如来坐像



挿図27 天龍山石窟東峰第4窟 本尊如来坐像

挿図28 石造如来坐像
梁・中大同元年(546)銘 上海博物館蔵

挿図25 石造如来坐像線刻画
(劉根等四十人造浮図記)
北魏・正光5年(524)銘 河南省博物館蔵

以上のように、涼州式偏袒右肩、雲岡第六窟式袈裟、龍門賓陽中洞本尊式袈裟の三つの着用方法はインドの如来像には見られない、中国の地域で独自に創案された表現であると考えられる。これらは次章で述べるような內衣や結紐を袈裟の中に表現することにより、様々なヴァリエーションを

生んだのであった。また、袈裟末端部の処理においては、北魏末〜東・西魏頃から再び左肩に懸ける形が増えてくるのである。⁽²⁶⁾

二、內衣と結紐

1、內衣の出現

ガンダーラの通肩の如来像は、袈裟の内側に何かを着ているのか着ていないのか、外見ではよく判らないが、立像で右手に懸かる袈裟の割れ目の中、脇腹の辺りに何か別の布の衣端がのぞく場合が往々にして見られる(挿図29)。一方、マトゥラーの偏袒右肩の如来像では袈裟は極めて薄く表わされ、中の肉体が透けて見えるが、內衣の表現はない。やがてガンダーラでも偏袒右肩像が造られるようになると、ようやく右胸部の袈裟の内側に僧祇支と思われる衣の縁が表わされるようになる。先にガンダーラの通肩像で認められた右脇腹の袈裟の中の衣端は、この僧祇支の衣端部であるのかもしれない。インドの仏像の內衣表現はマトゥラーではなくガンダーラに端を発しているらしい。⁽²⁷⁾

は、龍門賓陽中洞本尊式袈裟は見当らない。鞏県石窟は龍門賓陽中洞本尊式の像が非常に多いが、年代的には賓陽中洞より上がることは考えにくい。龍門賓陽中洞本尊式袈裟の出現については、後で裳懸座の問題とも合わせて、再度考える。

中央アジアの如来像もガンダーラと同様に、偏袒右肩の場合に胸元の袈裟の中から僧祇支と思われる衣の縁がわずかに表わされる。

2、中国の如来像の內衣と結紐

中国の如来像は、涼州式偏袒右肩の形式で衣端を左手で握ったり左前膊に懸けたりするようになると、袈裟の胸元を広く開けることになり內衣が明瞭に表現される。その後雲岡第六窟式袈裟や龍門賓陽中洞本尊式袈裟においては、ガンダーラ以来の僧祇支のほかに、中国の衣服によく似たものが內衣として登場するようになり、種類も増え、組み合わせも多様になって、その表現はさらに複雑化していく。また、內衣に付属して紐の表現も見られるようになり、特に胸の前に表わされる結紐は內衣の紐としての機能性以上に、胸元のアクセントとしての装飾的效果をあげている。もちろん、これらの內衣や結紐はみな袈裟の隙間から見え隠れしているので、当然その全容は見えない。しかし、見える部分の形を詳しく検討することで、見えない部分がある程度イメージすることは可能であろう。以下、中国の如来像の內衣と結紐について検討する。

a、僧祇支

內衣として最も基本的な衣で、左肩と腋を覆う布とされる。すでにガンダ

挿図29 ガンダーラの通肩
石造「燃燈仏授記」
カラチ博物館蔵

ーラにみられ、出現の時期はクシャーン時代に遡る。従って、僧祇支は中国の衣服ではない。內衣に中国風の衣服が登場した後もこれらと併用される。內衣の中で最も内側に、肌にしかに着用し、內衣を数種類重ね着する際も一番下になるため、目に見える形としては胸正面部に表わされた左肩から右腋への斜めの線と、その下方の袈裟の縁との間の部分である。

敦煌や炳靈寺の如来像の僧祇支の彩色を観察すると、地は中に丸文のある賽の目模様を表わすものが最も多いが、炳靈寺第一六九窟塑造無量寿仏坐像(図III)では亀甲紋とし亀甲の中に四葉状を描く。縁の部分は別の色で塗り分けられる場合が多い。また、雲岡第二〇窟本尊如来坐像(挿図8)や龍門古陽洞第三層如来坐像(挿図9)、藤井有鄰館蔵石造如来坐像のように縁に連珠文帯を刻むものもある。

僧祇支を締める紐は必ず表わされるわけではない。インド式の通肩像や偏袒右肩像、涼州式偏袒右肩像までは僧祇支の紐らしいものは見られない。涼州式偏袒右肩のうち袈裟の末端部を左前膊に懸けたり左手で握ったりする場合は、胸元が広く開いて中の僧祇支が腹の辺りまで見えるが、紐はない。僧祇支を紐で締める表現をするのはもつと後になって、雲岡第六窟式袈裟が出現して胸元に結紐が表わされるようになってからであろう。

b、両肩を覆う紐付きの衣

龍門賓陽中洞本尊像は胸元の僧祇支の上、二枚の袈裟の内側に、縦に細く袈裟とは別の衣がのぞき、その左右の襟に付いた紐を中央で結んでいる(挿図20-a)。この細い襟状部分についてはこれまで注目されていなかったが、筆者は、これを僧祇支の上に着した別の內衣の襟と考え、その上に袈裟を二枚まとうていると思うのである。この襟状の部分につけられた紐は、左右から中央へややたるみ気味に表わされており、僧祇支を締める紐や帯でないこ



裾と考えられる部分

挿図31 両肩を覆う紐付きの衣(図中網かけ部分)
麦積山石窟第121窟 塑造如来坐像



挿図32 龍門石窟賓陽中洞 維摩詰像

挿図30 麦積山石窟第127窟
石造如来坐像

布の端には縁取りが見える。ところで、仏教の維摩像にも胸前に襟状の部分と結紐を表わす衣を着

ていている例が見られる。例えば龍門石窟賓陽中洞前壁の浮彫りの維摩像(現在は削り取られて所在不明)(挿図32)は縁の付いている衣を肩に懸け、胸前には結紐が表わされている。古陽洞北壁第二層第三龕内の維摩も同様の衣を肩に懸け、襟に付いた紐を胸前で結んでいる。また、鞏県石窟第一窟の維摩像(挿図33)では袈裟状の衣(この維摩像は涼州式偏袒右肩のように右肩に半月形の衣が懸かる。)の下に内衣の襟の部分のぞき、そこに付いている紐を結んで垂らしている。この維摩像では胸正面部に僧祇支を表わす斜めの刻線はないので、結紐が僧祇支の紐でないことは明らかである。⁽³¹⁾中国の維摩像は維摩詰経に記された、維摩が病でやすんでいる情景を表現したもので、⁽³²⁾脇息や隠囊にもたれかかり塵尾を手にする士大夫の姿で表わされ、くつろいだポーズが多い。⁽³³⁾

如来像と維摩像以外では、龍門魏字洞南北両壁菩薩像に見られる。この菩薩像は如来像と違って袈裟を着けないかわりに、天衣で両肩を覆い膝上でX字状に交差させて両腕に懸けている。胸前は天衣が丁度襟のように下垂

挿図33 鞏県石窟第1窟 維摩詰像

とは明らかである。同様の表現は鞏県石窟や麦積山石窟の中国式着衣の如来像にも明瞭に認められる。⁽²⁸⁾また、麦積山石窟第一二七窟奥壁如来坐像(雲岡第六窟式袈裟)(挿図30)では、前面に垂れる袈裟の下の左右から三角形形状の衣が現われているが、これは袈裟でもなく涅槃僧(裙)⁽²⁹⁾でもないもので、袈裟の内側に着ている衣の左右の裾かもしれない。⁽³⁰⁾さらに麦積山石窟第一二一窟右龕如来坐像(雲岡第六窟式袈裟)(挿図31)にも同様の裾と思われる衣端がみられるが、こちらはかなりリアルで、腕に懸かって割れ目を表わし(袖状にはならない)、

布の端には縁取りが見える。ところで、仏教の維摩像にも胸前に襟状の部分と結紐を表わす衣を着

し、天衣の襟状部分の内側にさらに襟状の部分がありそこから紐が出て結んでいる。

このような衣はインドの仏像には見られず、中国において如来像の内衣として表現されるようになったものと思われる。そこでこの衣を漢民族の衣服の中に求めると、『北齊校書図卷』⁽³⁴⁾（ボストン美術館蔵）や唐時代の孫位筆『七賢図』⁽³⁵⁾（高逸図、上海博物館蔵）（挿図35）中の士大夫像が上半身に羽織っている紐付きの衣服がこれに近いと思われる。『北齊校書図卷』は五経等の書を校す場面、『七賢図』は竹林で清談する場面で、士大夫像はいずれもかなり自由なくつろいだポーズで表現されている。士大夫達の衣服は両

肩を覆う上半身の衣で、襟は打ち合わせずに垂下し、袖は見えない。生地

挿図34 北齊校書図卷 部分 ボストン美術館蔵

はかなり薄手で、中の体が透けて見えるものもある。襟や裾には黒い縁が付いている。胸元の左右の襟の部分に紐が付いており、結んでいる場合と結ばずに垂らしている場合とがある。衣服の丈は、いずれも坐像なので正確には判らないが、立てば腰の辺りまでであろうか。これら絵画作品の人物像が着ている衣の正確な名称は判らないので、ここでは「両肩を覆う紐付きの衣」と呼ぶ。

この衣はおそらく南北朝時代の士大夫達が日常着用していた衣服の一種と考えられる。中国式着衣の如来像や維摩像、菩薩像の、胸元に見える襟状部分と結紐は、このような衣服を內衣として着けていることの表現ではないだろうか。⁽³⁶⁾つまり、仏像が中国の知的貴族階級の姿に近づけられているのである。

c、襟を打ち合わせる衣

麦積山石窟（第一一四、一三九、八五窟ほか）、慶陽北石窟寺（第二一九窟）、陝西碑林博物館蔵の北魏・普泰元年（五三

挿図35 七賢図（高逸図）部分 孫位筆 上海博物館蔵

挿図36 石造碑像 北魏・普泰元年（531）銘 陝西碑林博物館蔵

一) 銘石造四面像(挿図36)など陝西周辺の中国式着衣像に多く表わされている。これらには僧祇支の表現は見えない。襟は右衽に打ち合わせる場合が多く、麦積山第八窟右壁如来坐像のように上に「両肩を覆う紐付きの衣」を重ね着するものもある(挿図37)。この衣の全体の形は判らないが、敦煌莫高窟第二三窟東壁に描かれた比丘像(挿図38)は袈裟の下に襟を右衽に打ち合わせた大袖の衣を着ているので、このような大袖付きの中国風の衣服と思われる。

大袖の衣服は六世紀代の菩薩像にも数多く認められ、中でも景明二年(五〇二)銘四面像(陝西碑林博物館蔵)中の脇侍菩薩像は早い作例で、麦積山石窟にも頻出する。また、龍門石窟においても古陽洞や蓮華洞に見られ、北



挿図37 麦積山石窟第85窟 右壁
塑造如来坐像

魏末から東西魏頃に流行する中国式菩薩像の一形式である。⁽³⁷⁾

d、偏衫

「偏衫」は北宋時代の『大宋僧史略』、『釈氏要覧』、『四分律行事鈔資持記』に記されるところでは、北魏時代(『釈氏要覧』では三国の魏と誤っている。)の宮人が右肩を露わにする僧の姿(インド式偏袒右肩)を嫌って、一枚の肩衣を施した

のが始まりであるとい⁽³⁸⁾う。つまり、インド以来の僧衣ではなく中国の北魏で考案されたということになる。

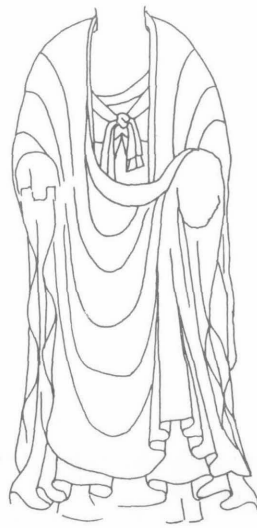
「肉体の露出を減じる」のがねらいであるから、中国的な趣向が反映されていることは確かであろう。

しかし、「偏衫」の実体については必ずしも明確ではない。南北朝時代の仏教彫刻の中に、北宋時代に言う「偏衫」が本当に表現されているか否かも判らないのである。龍門賓陽中洞本尊像において久野健氏が右肩を覆う偏衫、鞏鼎石窟如来坐像において田辺三郎助氏が両肩を覆う偏衫と見ているものは、⁽³⁹⁾前述したように内側のもう一枚の袈裟と思われる。六世紀後半に入ると、根津美術館の白玉如来立像(北斉時代)(挿図39)のように偏袒右肩像において、右肩から右腕を覆う一枚の衣が見られるようになる。この衣を偏衫とする見解は逸見梅栄氏以来多い。⁽⁴⁰⁾ただし、このタイプでは、背面にまわって見ると衣が右肩だけを覆っている場合と、襟が左肩の方へ伸びて両肩を覆うように見える場合とがある。前者の作例は、日本の法隆寺献納宝物第一五四号金銅如来立像が挙げられるくらいで、中国の作例は今のところ確認していない。一方、後者の作例は中国にも日本にも多数認められる。根津美術館像もこの例である。ただし、後者の衣が偏衫であるという確証はない。⁽⁴¹⁾以上のように、偏衫については今後一層の研究が必要であるが、文献に伝えられるような北魏創案を裏づける作例は見当たらない。

e、結紐について

挿図39 石造(白玉)如来立像
根津美術館蔵

雲岡第六窟式袈裟や龍門賓陽中洞本尊式袈裟などの中国式着衣の像では胸元に結紐が表わされる場合が多い。もちろん表わされない場合もある。この結紐の実体については涅槃僧（裙）の紐、僧祇支の紐、內衣の紐など研究者によって理解に違いがある。田辺三郎助氏は偏衫について考察する中で、麦積山石窟第一二六窟如来坐像（挿図26）を取り上げ、両肩にかけて布端を正面で結んでいる場合があることを指摘し、「この結び目の実体はもう少し究明する必要がある。」として慎重な立場をとっている。⁽⁴²⁾この麦積山第一二六窟像には襟状部分が中央に引っ張られているため布そのものを結び合わせて



挿図40 龍門石窟蓮華洞本尊如来立像の結紐



挿図41 麦積山石窟第83窟 塑造如来坐像

いるように見えるが（麦積山にはこのほか第一三八、第一四〇窟などにも見られる。）、結び合わせの先は長く紐状となって垂れているので、やはり襟（例えば「両肩を覆う紐付きの衣」のような內衣の襟）に付いている紐を結んでみるとみるべきかと思われる。

そこで、この種の胸元に表わされた紐を注意深く観察すると、それらの形状は決して単一ではない。また結紐は一つとは限らず二つ表わされる場合もある。例えば龍門蓮華洞本尊像（雲岡第六窟式袈裟）（挿図17・40）では胸元に結紐が上下二段に表わされている。上の結紐は「両肩を覆う紐付きの衣」の紐で、下の分は僧祇支を締め

挿図42 麦積山石窟第20窟 塑造如来坐像

挿図43 石造仏立像 臨潼県博物館蔵

めている紐と思われる。なぜなら、下の結紐は、僧祇支を締めためたためにできる布のたるみを表わす衣文線の所に表わされているからである。また、麦積山石窟第一四六窟正壁如来坐像（雲岡第六窟式袈裟）のように明らかに僧祇支を紐で締めている（布のたるみを表わす衣文線がある）のに、結紐を表わさない場合も多い。

これらの紐は確かに装飾的な効果を意識しているの

であろうが、衣服と何の関係もなく表現されているわけではない。如来像に表わされた結紐の実体としてはおよそ次の場合が考えられよう。

①僧祇支を締めている紐（挿図41）

②「両肩を覆う紐付きの衣」の紐（挿図42）

③涅槃僧（裙）を締めている紐（挿図43）

南北朝時代の如来像の胸元に表わされた結紐は、そのほとんどが①や②で、③は少ない。中でも②の表現が多く、五世紀末から六世紀中頃までの中国式如来像にさかんに表わされている。やがて六世紀後半頃から、両肩を覆う紐付きの衣を內衣として表わすことが減少し始め、②の表現もあまり見かなくなり、①の存在が目立つようになる。隋以降は①の表現が多い。③の涅槃僧（裙）の紐は腰の辺りに締めるのが自然であるから、胸元に表わすのは少々無理であろう。

これらの結紐については小杉一雄氏以来、漢民族の士大夫が着用した「紳帯」との関連が指摘されている。⁽⁴³⁾ただし、如来像に表わされている結紐が紳

帯そのものであるとは思えない。鞏県石窟第一窟の礼仏図浮彫には紳帯つまり大帯を締めた人物像（挿図44）が見られるが、大帯は腰の辺りに締めており、その先は長く垂れて膝下まで達している。仏像に表わされた結紐はこれらに比べるとかなり短かい。また、大帯は着物の胴回りを押さえるようにぐりりと一周して締めるものであるが、仏像の結紐は胸元に表わされる場合が多く、特に左右の襟からやや垂れ気味に表わされた龍門寶陽中洞本尊像の結紐などはまったく別のものと思われる。また、中国式着衣像で結紐を表わさない例も数多く存在する⁽⁴⁴⁾ことを思うと、結紐の表現は中国式仏像において絶対条件ではなく、內衣との関係で取捨選択されたものであると考えるべきであろう。

以上ここまででは、袈裟の着用法と內衣や結紐の表現という、おもに如来像着衣の上半身に現われたさまざまなかたちについて見てきた。すでにそれらを通して、五世紀末から六世紀初めにかけて如来像の着衣表現が中国風へと大きく変化した様子はわかるが、次章では下半身の衣の表現、いわゆる裳懸座の表現に注目しその意匠についての認識を試み、特に北魏における如来像着衣表現と北魏皇帝の仏教信仰との関係について論を進めることとする。

注

(一) 袈裟はサンスクリットの「Kasaya」の音訳で「濁った色」を意味する。仏教の律では出家者はこの濁った色の衣を三種類（三衣）持つことがゆるぎされている。大衣（僧伽梨）と上衣（罽多羅僧）と中衣（安陀会）である。このうち大衣が正装の衣で、如来像が身に纏っているのは多くの場合これにあたると思われる。ただし、「大衣」は中国での呼称で、唐時代以降の經典に見られ（道宣撰『道宣律師感通録』へ大正藏經 NO. 2107）や義浄撰『根本説一切有部毘奈耶』へ大正藏經 NO. 1442）ほか）、北魏時代までに漢訳された經典中では主に「僧伽梨」

挿図44 鞏県石窟第1窟 礼仏図浮彫

と訳されている。また、如来像が着ている衣が必ずしも僧伽梨とは限らず、鬱多羅僧や安陀会である可能性もある。したがって、本稿では如来像がいちばん外側に纏っている衣を「大衣」や「僧伽梨」とはあえて呼ばず、三衣の総称である「袈裟」という名称で呼ぶことにする。

- (2) 『舍利弗問經』(東晋・失訳、大正藏經 NO. 1465) に「舍利弗言。云何於戒誡中。令弟子偏袒右肩。又迦葉村人說城喻經云。我諸弟子當正被袈裟。俱覆兩肩勿露肌肉。使上下齊平現福田相行步庠序。又言。勿現胸臆。於此二言云何奉持。佛言。修供養時。應須偏袒。以便作事。作福田時。應覆兩肩。現田文相。(中略)云何作福田時國王請食。入里乞食。坐禪誦經巡行樹下。人見端嚴有可觀也。」とあり、唐時代の『四分律刪繁補闕行事鈔』(道宣撰、大正藏經 NO. 1804) に「初聽偏袒者。謂執事恭敬故。後聽通肩披衣。示福田相故。」とある。偏袒右肩は執事恭敬、通肩は福田相を示すものとされる。このような区別がいつごろからあったかは明らかではないが、すでに初期阿含經典中で弟子が釈迦に対して発言する際に衣服を偏袒右肩にする様子が記されている。ガンダーラの初期の彫刻において如来像がいずれも通肩であるのに対して比丘像に偏袒右肩がみられる(挿図 2)のは、こうした意識つまり弟子が師に対する際には右肩を露わにするという意識が反映されているのであろう。一方、マトゥラーでは初めのうちは通肩の如来像が見られず偏袒右肩像ばかりである。如来が執事恭敬の偏袒右肩で表わされるのは不可解な感もあるが、マトゥラーでは如来像に「菩薩」銘を刻むなど仏陀を表現することへの禁忌意識が認められるので、通肩の如来像が造られていないのはあるいはそうしたことと関係があるのかもしれない。中国においては、漢代の鏡や青磁などに表わされた最初期の仏像は通肩で、南北朝代になって偏袒右肩が見られるようになる。
- (3) キジル石窟やクムトラ石窟など中央アジア美術についてはそれぞれの様式変遷はたどれるものの、絶対年代については研究者によってかなりの開きがある。従って、ここに挙げたクムトラ四六窟や GK 二〇窟が、中国の同形式の像より早いか遅れるかは決められない。中央アジア美術の年代については今後の研究の進展を切望する。
- (4) 敦煌莫高窟第二六八、二七二、二七五窟は一般的には北涼期とされるが、これらを西暦四〇〇年から四二一年の間敦煌を占拠した西涼期の作とする説もある。王寵「張掖金塔寺と敦煌莫高窟―甘肅の早期二石窟に関する考察」(『佛教藝術』一七九号、毎日新聞社、一九八八年)。
- (5) 右肩から手首までを袈裟のなかに収める表現はガンダーラの彫刻にも見られる

が、ガンダーラの場合は通肩に着た袈裟の襟から手首をだしたような形態で、さらに襟の部分を持って握っている。このような所作はギリシア・ローマ彫刻中の人物像に少なからず認められ、影響関係が想像される。ガンダーラでは如来像には少なく、比丘像に多い。従って、中国の施無畏印や禪定印の偏袒右肩如来像とつながりは考えにくい。ただし、仏教においては「大比丘三千威儀」(後漢・安世高訳、大正藏經 NO. 1470) に「行到時著法衣。有五事。一者道中見三師。當出右肩。二者覆兩肩。當從喉下出右手。三者覆兩肩。得從下出右手。」云々とあり、通肩の襟口から右手を出す形も偏袒右肩同様、師に対して恭敬の意を表わす相であることが判る。

- (6) 楊泓「試論南北朝前期佛像服飾的主要變化」(『考古』一九六三年第六期)。浅井和春「敦煌石窟學術調査(第一次)報告書」第一八―二二頁(東京芸術大学美術学部、一九八五年)。
- (7) 『魏書』一一四 釈老志。「和平初、師賢卒。曇曜代之、更名沙門統。(中略)曇曜白帝、於京城西武州塞、鑿山石壁、開窟五所、鑄建佛像各一。高者七十尺、次六十尺、彫飾奇偉、冠於一世。」
- (8) 長廣敏雄「大同石仏芸術論」(高桐書院、一九四六年)。
- (9) 小杉一雄「裳懸座考」(『佛教藝術』五号、毎日新聞社、一九四九年)。
- (10) 注 6 楊氏前掲論文。
- (11) 吉村怜「曇曜五窟論」(『佛教藝術』七三号、毎日新聞社、一九六九年)。同「龍門様式南朝起源論―町田甲一氏の批判に答えて―」(『國華』一一二二号、毎日新聞社、一九八九年)。
- (12) 逸見梅栄「仏像の形式」(東出版、一九七〇年)。
- (13) 田辺三郎助「鞏県石窟の北魏造像と飛鳥彫刻」(『中国石窟 鞏県石窟寺』平凡社、一九八三年)。
- (14) 注 6 浅井氏前掲論文。
- (15) 雲岡石窟第五一一(五A)窟西壁の如来坐像は、両肩を覆う紐付きの衣の上で涼州式偏袒右肩に袈裟を着け、衣端は左前膊に懸けて、下半身は裳懸座になっている。このタイプは雲岡石窟ではさきわめて稀である。
- (16) 『摩訶僧祇律』(東晋・佛陀跋陀羅共法顯訳、大正藏經 NO. 1425) の中に「通肩被著」とあり、『長阿含經』(後秦・佛陀耶舍共竺佛念訳、大正藏經 NO. 1) や『大般涅槃經』(東晋・法顯訳、大正藏經 NO. 2) などに「偏袒右肩」の語が見える。
- (17) 『舍利弗問經』(東晋・失訳、大正藏經 NO. 1465) には、通肩では胸臆を露わに

してはいけなさと記されている。注2参照。

(18) 雲岡石窟で中国式着衣像が現われる第一六(本尊)・五・六窟の年代について、長廣敏雄氏は第五窟を四八二年、第六窟を四八三年、第一六窟本尊は四八九年前後の完成と推定した(『雲岡石窟 中国文化史蹟』世界文化社、一九七六年)。宿白氏は第六窟は洛陽遷都(四九四年)直前に完成し、第五窟は遷都により中断、第一六窟本尊はこれらと同時期(第二期晚期)とした。(『雲岡石窟分期試論』『考古学報』一九七八年第一〇期)。このほか、吉村怜氏は雲岡石窟では開窟当初から中国式着衣と西方式着衣が同時に併存したとして第一六窟本尊を四六〇年代、第五・六窟を四七〇年代に完成したとする(『雲岡石窟編年論—宿白・長廣学説批判—』『國華』一一四〇号、一九九〇年)。ただし、吉村氏の様式論はこの時代の文化の中心を南朝一辺倒で捉える歴史観に基づくもので、個々の作例の具体的な検討がなされておらず、理解できない部分が多い。

ところで、吉村氏は同論文において宿白氏および長廣敏雄氏の雲岡石窟の編年に関する考え方を批判する中で、「最近になって宿氏が自説を重ねて強調されたのに対して、長廣氏が従来の主張を大幅に変更して、宿白学説を支持されている」と述べている。しかし長廣氏は、宿白氏との永年の論争の対象となっている第九・第一〇窟の造建年代について「文献学的にみる限り、宿白教授の推論は誤りがないだろうから、同教授の分期論は一応筋が通っている。現時点で私はそれを『宿白説』として認める。」(傍点筆者)とし、その年代に関する結論を自身としては「保留したい。」(『雲岡石窟第9・第10双窟の特徴』『中国石窟 雲岡石窟』二二四頁、平凡社、一九九〇年)と言っている。この両窟に限っても自説を変更したと思われる記述は見あたらない。吉村氏はその他の窟についてまでを含めて「長廣氏の最近説は宿白説とほとんど変わりが無い」と断定しているようだが、宿・長廣両氏の年代論の違いは、例えば第五・第六双窟の造建状況を考える中で端的にあらわれるように両氏の雲岡石窟芸術に対する様式観の違いに根ざしている部分が大きく、長廣氏がその様式観において宿氏に歩み寄った形跡はまったくない。吉村氏の、とくに長廣氏の論文に対する読み取りに大きな問題のあることを指摘しないわけにはいかない。

なお、吉村論文は表1に宿白(従来)・長廣敏雄・吉村の三氏それぞれの雲岡石窟造窟の年代説を挙げているが、そのうち「従来の長廣説」とする中で、第五・第六双窟を第一・第二双窟の前に置いているのは、実際の従来の長廣説(前掲『雲岡石窟 中国文化史蹟』)とは異なるから、読者は注意を要する。

(19) 雲岡の涼州式偏袒右肩像は衣端を左肩に懸けるものばかりである。従って、雲

中国南北朝時代の如来像着衣の研究(上)

岡内部では涼州式偏袒右肩と雲岡第六窟式袈裟との関連性は薄い。

(20) 龍門石窟賓陽中洞は『魏書』釈老志に記載された宣武帝發願の、孝文帝のための石窟とされる。『魏書』一一四 釈老志「景明初、世宗詔大長秋卿白整準代京靈巖寺石窟、於洛南伊闕山、爲高祖、文昭皇太后營石窟二所。初建之始、窟頂去地三百一十尺。至正始二年中、始出斬山二十三丈。至大長秋卿王質、謂斬山太高、費功難就、奏求下移就平、去地一百尺、南北一百四十尺。永平中、中尹劉騰奏爲世宗復造石窟一、凡爲三所。從景明元年至正光四年六月己前、用功八十萬二千三百六十六。」

また、その完成年代は、熙平二年(五一七)靈太后胡氏の伊闕石窟寺行幸が一つの目安と考えられる。陳明達「鞏縣石窟寺的雕鑿年代及特點」(『鞏縣石窟寺』所収、文物出版社、一九六三年)、同「鞏縣石窟寺の開鑿年代とその特徴」(『中国石窟 鞏縣石窟寺』平凡社、一九八三年)。温玉成「龍門北朝期小龕の類型と分期及び北朝期石窟の編年」(『中国石窟 龍門石窟』二)平凡社、一九八七年)、稲本泰生「龍門賓陽中洞考」(『京都大学文学部研究紀要』一三三号、京都大学文学部美術史研究室、一九九二年)。

(21) 大西修也「百済の石仏坐像—益山郡蓮洞里石造如来像をめぐって—」(『佛教藝術』一〇七号、毎日新聞社、一九七六年)、同「百済仏再考—新発見の百済石仏と偏袒を着用した服制をめぐって—」(『佛教藝術』一四九号、毎日新聞社、一九八三年)。この中で大西氏は「二枚の大衣を重ねていた」と推定している。

(22) 久野健「東アジアの仏像と偏袒」(『古代小金銅仏』所収、小学館、一九八二年)。

(23) 注13田辺氏前掲論文。

(24) 注6浅井氏前掲論文。

(25) 天龍山石窟の各窟の名称は『中国美術全集 雕塑編13 鞏縣天龍山響堂山安陽石窟雕刻』(文物出版社、一九八九年)に拠った。

(26) 水野敬三郎氏は法隆寺金堂釈迦三尊像の着衣形式について論じる中で、袈裟の襟を立て胸を大きく開く服制には、袈裟末端部を左前膊にかけるものと左肩にかけるものの二種があり、後者は早く東魏代に作例が認められることを指摘している。「釈迦三尊と止利仏師」(『奈良の寺』法隆寺金堂釈迦三尊)所収、岩波書店、一九七四年)。

(27) 僧祇支はサンスクリット「saṅkāsika」の音訳。のちに唐の玄奘は僧却崎と音訳している(『大唐西域記』(大正藏經NO. 2087))。元来比丘や比丘尼が胸元を隠すために袈裟の下に着用する衣といわれるが(『摩訶僧祇律』東晋・佛陀耶舍

共竺佛念等訳《大正藏經 NO. 1425》、『彌沙塞部和醯五分律』劉宋・佛陀什共竺道生等訳《大正藏經 NO. 1421》、マトウラーやサルナート等インド中々南部の仏像では Gupta 時代になっても (Gupta の如来像は通肩が多いが) 薄い袈裟の内側に內衣を着ている形跡はない。これはあるいは気候に対応して、北の寒冷地域では內衣を着け、南の温暖地域では着けないから、とも考えられる。

(28) 雲岡第六窟等の如来像の結紐は、左右の襟の部分を表わされるものと表わされないものがあるが、同様の內衣を着けている可能性は高い。

(29) 涅槃僧はサンスクリット [nivasana] の音訳で、『四分律』(後秦・佛陀耶舎共竺佛念等訳、大正藏經 NO. 1428) や『薩婆多部毘尼摩得勒伽』(劉宋・僧伽跋摩訳、大正藏經 NO. 1441) など、南北朝五世紀前半の經典に見え、また別に泥洹僧(後秦・弗若多羅共羅什訳『十誦律』《大正藏經 NO. 1435》)とも言う。こんにちでは、これを裙または裳と称するが、裙は義浄による律部諸經典(『根本一切有部毘奈耶』《大正藏經 NO. 1442》ほか)に見えるように、唐になってからの意識である。義浄より先に玄奘は、インドの僧侶の法服に関して、三衣と僧却崎(僧祇支)と泥縛些那があり、泥縛些那は唐時代には裙と呼ばれ、また旧来からある涅槃僧の呼び方は訛りである、と述べている(『大唐西域記』卷第二《大正藏經 NO. 2087》)。いっぽう裳は、本来仏教經典に見える語ではなく、中国の伝統的な衣服としての裳、あるいは下半身に着す服飾の総称としての裳が転じて、こんにち裙と同義にも使われるようになったものと思われる。以上のことから、南北朝期の仏像着衣の形状と名称の問題を扱った本稿においては、当時一般に用いられていたと思われる涅槃僧(後の玄奘によって訛りと見做されているが)を採用しておく。

(30) このほか四川省茂県出土の南齊・永明元年銘の如来坐像も、裳懸座前面の袈裟の下の左右に同様の表現が見られる。

(31) この像では、厳密には胸前の左右の襟状部分の下端は涅槃僧(裙)の中に消えている。

(32) 『佛說維摩詰經』(吳・支謙訳、大正藏經 NO. 474) 諸法言品第五。『維摩詰所說經』(後秦・鳩摩羅什訳、大正藏經 NO. 475) 文殊師利問疾品第五。

(33) 維摩像にはこのほか、袖のないマント状の衣を羽織って胸前で紐を結ぶもの、袖付きの外套のような衣を袖を通さないで羽織って胸前で紐を結ぶもの、鶴の羽で作った衣。隠者が着た) のような衣を羽織るもの、大袖の衣を着るものなどがある。

(34) 北齊の文宣帝が天保七年(五五六年)に樊遜らに命じて五經諸史を校させた故

事を描いたもので、現存するものは宋代の模本である。

(35) 竹林七賢。魏の時代(三世紀)に世塵を避けて竹林に会し清談を事としたといわれる七人の隠士のこと。

(36) 敦煌莫高窟第二八五窟北壁の如来像や東壁の比丘像(いずれも壁画)の中にも同様の襟状部分と結紐を表わす內衣を着す像があるが、これらでは大袖が付いている場合がある。

(37) 石松日奈子「龍門北魏窟の研究——龍門北魏様式の形成における中国化の問題」(『鹿島美術財団年報』第八号、一九九一年)の中の《龍門古陽洞の大袖菩薩像》参照。

(38) 『大宋僧史略』(宋・贊寧撰、大正藏經 NO. 1126)。『釈氏要覽』(宋・道誠集、大正藏經 NO. 2127)。『四部律行事鈔資持記』(宋・元照撰、大正藏經 NO. 1805)。

(39) 注22久野氏前掲論文。注13田辺氏前掲論文。

(40) 注12逸見氏前掲書。この他偏衫について論及したのものとしては、注6浅井氏前掲論文、注21大西氏前掲論文がある。

(41) 前述したように北魏には「両肩を覆う紐付きの衣」が多く見られるが、これと六世紀後半以降に見られる根津美術館像のような両肩を覆うように見えて紐のない衣との関係を考える必要があろうし、またもつと別の衣、例えば鬱多羅僧や安陀会の可能性についても考慮する必要がある。一方これらとは別に、法隆寺献納宝物第一五二号金銅如来立像のように、右肩のみに布を懸けてそれを体部正・背面を斜め懸けにする紐で留めている例もある。また麦積山石窟第一〇五窟、一二窟の塑造比丘立像では、いずれも右肩をわずかに覆う布に体部前面を降りる紐を付ける表現があるが、これらは壁面を背にして造られているため背面での形状が判らなく (MICHAEL SULLIVAN "The Cave Temple of Maichishan" UNIVERSITY OF CALIFORNIA PRESS, 1969. 図版35' 36')。

(42) 注13田辺氏前掲論文。

(43) 注9小杉氏前掲論文。その後、吉村怜氏は雲岡や龍門の胸に結紐を表わすものを「胸元に紐を垂らしている点に特徴がある」として「紳带式仏衣」と呼び、村田靖子氏もこれに同調している。注11吉村氏前掲論文「龍門様式南朝起源論——町田甲一氏の批判に答えて」。村田靖子「止利式仏像の服制についての一考察——結紐と裳懸座——」(『美術史』一三三号、美術史学会、一九九三年)。

(44) 例えば雲岡石窟第六窟像はいずれも結紐を表わすが、第五窟には結紐を表わすものと表わさないものと両方がある。

〔図版の出典〕

本稿で使用する図版のうち、挿図32以外の描き起こし図はすべて筆者兩名が作成したものである。また写真による図版は一部筆者の撮影によるものを使用し、残りを既刊書から複写・転載した。以下にその出典を記す。

- 図III 『中国石窟 炳靈寺石窟』平凡社、一九八六年。
 図IV 『雲岡石窟』第三卷 京都大学人文科学研究所 一九五五年。
 図V “ARTS OF CHINA, Buddhist Cave Temples” KODANSHA INTERNATIONAL LTD. 1969.
 挿図1、3、4、5、6、29 『岩宮武二写真集 アジアの仏像 上』集英社、一九八九年。
 挿図2 『ガンダーラ美術Ⅰ 佛伝』二玄社、一九八八年。
 挿図9、17、22 『中国石窟 龍門石窟 一』平凡社、一九八七年。
 挿図10 『中国石窟 雲岡石窟 二』平凡社、一九九〇年。
 挿図11 『シルクロード・仏教美術伝来の道』(展覧会カタログ) 奈良国立博物館、一九八八年。
 挿図12 『特別展図録 金銅仏 中国・朝鮮・日本』東京国立博物館、一九八八年。
 挿図13 『中国美術全集 雕塑編10 雲岡石窟雕刻』文物出版社、一九八八年。
 挿図14、34 『中国美術全集 繪畫編1 原始社会至南北朝繪畫』人民美術出版社、一九八六年。
 挿図18、30、42 『中国石窟 麦積山石窟』平凡社、一九八七年。
 挿図23 『中国石窟 鞏県石窟寺』平凡社、一九八三年。
 挿図24 『中国美術 第三卷 彫塑』講談社、一九七二年。
 挿図25 『中国美術全集 繪畫編19 石刻綫畫』上海人民美術出版社、一九八八年。
 挿図28 『中国美術全集 雕塑編3 魏晋南北朝雕塑』人民美術出版社、一九八八年。
 挿図32 『龍門石窟の研究』東方文化研究所、一九四一年。
 挿図33、44 『鞏縣石窟寺』文物出版社、一九六三年。
 挿図35 『中国美術全集 繪畫編2 隋唐五代繪畫』人民美術出版社、一九八四年。
 挿図38 『中国石窟 敦煌莫高窟 一』平凡社、一九八〇年。
 挿図39 『中国の彫刻—石仏・金銅仏—』日本経済新聞社、一九六〇年。

図版要項

- 一 地藏十王図 (原色刷)
 絹本着色 掛幅装 縦一一五・〇cm 横五八・八cm 山形華藏院藏
- 二 地藏十王図 (原色刷)
 絹本着色 掛幅装 縦一五六・一cm 横八五・一cm 京都知恩院藏
- 三 炳靈寺石窟第一六九窟 無量寿仏坐像
 塑造 像高一二三cm 西秦・建弘元年(四二〇)銘 中国甘肅省永靖
- 四 雲岡石窟第六窟 東壁上層 如来立像
 石造 像高三〇五cm 中国山西省大同
- 五 如来坐像
 石像 像高一二八cm 南齊・永明元年(四八三)銘 中国四川省博物館藏
- 六 龍門石窟賓陽中洞 本尊如来坐像
 石像 像高六四五cm 中国河南省洛陽
- 七 地藏十王図 (部分)
 三二六 岡田健・石松日奈子「中国南北朝時代の如来像着衣の研究(上)」参照 京都知恩院藏
- 八 地藏十王図 (部分)
 山形華藏院藏
- 九 同 (部分)
 同
- 十 同 (部分)
 一・二、七—十 中野照男「高麗時代の地藏十王図」参照 同